

特集

『ダ・ヴィンチ・コード』翻訳者が徹底解説

なぜ？ 簡単なのに 必ず誤読する英文

I don't agree with you, but I know you mean well.



この英文の意味を正確に理解できる人は何人いるだろうか（解説と正解は p.45）。自分では理解できていると思っている英文でも、本当の意味は全然違う——ということが、実は多い。正しく理解できているかどうかを確認するには、実際に訳してみるのが王道だ。

今月号では、ベストセラー『ダ・ヴィンチ・コード』をはじめとするミステリーの翻訳家として知られる越前敏弥氏が厳選した英文を提示。その英文を読んで訳してみしてほしい。おそらく多くの読者が誤読してしまうだろうが、長年にわたって予備校や翻訳教室で教えてきた越前氏の解説を読めば、英語を読む際の観点が大きく変わるはずだ。

特集の最後には、越前氏が英語学習者の悩みについて答えている。英語初級者、中級・上級者に関係なく、学習する上でのヒントが見つかるだろう。

執筆：越前敏弥（えちぜん・としや）

文芸翻訳者。1961年、石川県金沢市生まれ。東京大学文学部国文科卒。学習塾経営、留学予備校講師などを経たのち、37歳からエンターテインメント小説の翻訳を開始。訳書に『ダイアローグ』『おやすみ、リリー』『世界文学大図鑑』『鏡の迷宮』『生か、死か』『解錠師』『ダ・ヴィンチ・コード』『Yの悲劇』など。著書に『翻訳百景』『日本人なら必ず誤訳する英文』などがある。



程度の差こそあれ、誤訳は誰にでもあります。人間である以上、ミス
をしないことはありません。また、もともと異なる言語で書かれたもの
を別の言語へ 100% 正確に移し替えることはできない、というのも事実
です。わたし自身も、うっかり読み間違えることがしばしばあります。

しかし、だからと言って、つまらない誤訳を防ぐ、あるいは減らす努力
を怠ってよいことにならないのは当然です。ここでは、わたしが教えて
きた翻訳クラスの受講生の訳文などを題材にし、下に掲げた「誤訳を
防ぐための3カ条」に基づいて、どうやったら少しでも減らせるかを考え
ていきます。誤訳例はほとんどがクラス生による実例です。

誤訳を防ぐための3カ条

第1条

常識を働かせて、違和感を覚えたら読みなおし、ゆっくり考えなおす。
違和感には、大きく分けて「形」と「意味」の2種類がある。

第2条

自分の弱点である文法事項を知り、覚えるべきことを覚える。文脈か
ら判断できない場合、最後の砦は文法の知識。日本人が最も多く誤
訳・誤読する文法事項はつぎの三つ。

- ① 否定
- ② 冠詞の有無や単数形・複数形の区別
- ③ カンマや and や or で何と何が並ぶか

第3条

自分の持っている知識など、たかが知れていると自覚して、つねに調
べ物を怠らない。

英文を読んで 訳してみよう!



問題1

Good silver plate was displayed on the buffet, but the curtain behind the table looked dusty.

誤訳例

⇒ 食器棚には良質の銀皿が飾られているが、食卓のうしろにかかっているカーテンは埃がかぶっているように見えた。

誤読・誤訳に気づくためにまず必要なのは、《第1条》にもあるとおり、「形の違和感」と「意味の違和感」の両方に敏感になることです。

ここでは、何よりも、Good silver plateになぜ冠詞がないのか、あるいはなぜ複数形になっていないのかと疑問に感じられるかどうか、誤訳を見抜けるかどうかの鍵となります。仮にplateの意味として「皿」しか知らないとしても(たぶん多くの人知らないでしょうし、知らないこと自体は恥でもなんでもありません)、違和感を覚えたらすぐに辞書を引けるかどうか、上達できるかどうかの分かれ道です。

ただ、《第2条》の②にもあるとおり、冠詞の有無と名詞の単複は、日本人が最も苦手とする文法事項です。そもそも冠詞は日本語に存在しないものなので、英語を母国語としないわれわれが見落としがちなのは、ある程度はやむをえないことかもしれません。「形の違和感」の助けを借りられなかったとき、つぎに頼るべきなのは「意味の違和感」です。この英文で描かれている場面を目に浮かべてみてください。食器棚にたった1枚の皿、しかも銀色の皿(大皿?)が飾られている状況は、ありえないとまでは言いませんが、かなり奇妙だと思いませんか。そう思った人は、やはりplateを辞書で引くでし

よう。そして、そのように批判的な目で辞書をゆっくり見ていけば、すぐに集合名詞としての「食器類」の意味が見つかるはず。1枚の皿ではなく、銀の(あるいは銀メッキの)食器がたくさん並んでいるのなら、おかしな光景ではありません。

まずはこの二つの違和感を無視せずに、すぐに調べるか、あるいはゆっくり考えるかのどちらかで、誤読・誤訳はかなり防げます。

正しい訳例

⇒ 食器棚には上等な銀の食器類が飾られていたが、卓の向こうのカーテンは埃でくすんで見えた。

問題2

Mr. Brown didn't like his daughter hanging out with boys like Tim, but Jane wouldn't be told.

(主人公はJane)

誤訳例

⇒ ブラウン氏は娘がティムのような少年と親しくするのを好まなかったが、ジェーンには何も言わなかった。

まずいのは最後の部分です。

be toldだから、ブラウン氏から告げられなかったのだろうとなんとなく判断したのですが、wouldn'tを無視していますし、そういう意味であれば、わざわざJaneを主語として受け身で書くのはとても不自然です。違和感を覚えたらゆっくり考えなおすのが鉄則でしたね。

ここでは、Janeが主人公(視点人物)ですから、wouldn'tはJane自身の強い拒絶を表すと考えるのがごく自然であるはず。それでも意味がはっきりしないと思ったら、ある程度の予想をしながら、tellなり told